● 読書感想文コンクール 小学校 4･5･6 学年 の部●

優秀賞

山中　智裕（やまなか　ともひろ） 由木中央小 ４年生

作品名:「しろばんば」を読んで
図　書:しろばんば

囲炉裏、こたつ、ぼくは、そのような昔の物が好きです。なぜかというと、昔の物は、身近なもので工夫されていてそのようなものには落ち着きがあり、心がおだやかになるからです。ぼくは、夏休みに、祖父母の家で蚊帳の中で横になってみました。すると、気持ちが落ち着いてウトウトと眠くなり、ふとわれにかえると、いつの間にか一時間ぐらい眠ってしまいました。そんな昔好きのぼくにぴったりだと言って、お母さんがしょうかいしてくれた本が「しろばんば」でした。ぼくは、おもしろすぎてむ中で読みました。川に飛び込んで遊ぶ子どもたちにぼくはあこがれて、自分も本の中に入り込みたくなりました。

この物語は、小学生の洪作が、おぬいばあさんというおばあさんと、土蔵で生活しながら、すごす毎日が書かれた物語です。この物語には、色々なこ性の人たちがいて、その人たちと洪作との会話ややり取りが、とても面白いと感じました。

夏休みのある日、校長先生をしている伯父さんの家に泊まりに行った洪作は、こわいおはぐろをべったりぬった伯母さんの顔を見て、たまらなくなり、急いで遠くはなれたおぬいばあさんのいる土蔵へ逃げ帰ります。ぼくは、本当のおはぐろを見たことがないけれど、水木しげるのおはぐろべったりという妖怪を見たことがあります。黒い歯はとても不気味で、きっとぼくもおはぐろべったりの顔を見たら、逃げ出したくなります。

他にも面白い話がたくさんありますが、やっぱりこの物語の中で、ぼくが一番面白いと思ったのは、おぬいばあさんです。洪作は五才のころから父母のもとをはなれ、血のつながらないおぬいばあさんとくらしています。おぬいばあさんは、洪作の生まれた本家からも村人からもよそ者として白い目で見られる立場の人でした。おぬいばあさんは、本家の子供たちを、「ぐず」や「のろま」などの悪い形容詞をつけて呼んだりします。ふつう大人の人はそんな悪口を言わないので、ぼくはおもわずわらってしまいました。悪口はいけないけれど、ぼくはこうしたおぬいばあさん

の悪口に負けん気を感じるので、きらいではありません。おぬいばあさんは、みんなから白い目で見られているけれど土蔵で頑張ってくらしています。おぬいばあさんがくらしている土蔵はちょっと変わっていて、ぼくはきょう味があるけれど、暗くて冷たい感じがしてぼくだったら長くはくらせないかなと思います。そんな土蔵で暮らしているおぬいばあさんだからこそ、悪口も「負けないぞ」という負けん気に感じるのかもしれません。もしお屋しきにでも住んでいて、同じような悪口を言ったとしたら、それは自分を悪くいう者をはいじょしようとするただのわがままと感じるので、ぼくは好きではありません。

一方で、おぬいばあさんは、ある意味わがままなこ性も持っていると思います。例えば、運動会の時にお弁当のたまごを洪作に届けるため、入ってはいけない運動場を、注意されながらもわたり続ける場面があります。でも、このようなおぬいばあさんも面白くて思わず笑ってしまいました。なぜかというと、このわがままは、赤ちゃんがわがままを言っても、かわいくてゆるせる様に、おばあさんがわがままを言っても、まあしょうがないか、とゆるせてしまうからです。それどころかぎゃくにそれが面白くて、味がある様にさえ感じます。ぼくはこうしたおぬいばあさんのこ性的な性格が好きです。

この物語は、読み終わってからも後からじわじわとおもしろさがよみがえってくる物語だと感じました。「しろばんば」は、井上靖の子供のころの話だと聞きました。伊豆の湯ヶ島というところに今もまだ洪作たちが遊んだ川などの場所が残っているというので、ぜひ見に行ってみたいです。